

# 「人国記」所載の気候について\*

渡 辺 次 雄\*\*

## 1. まえがき

気候の長期変動をしらべる際に、古代の気候概念を知ることは重要である。さきに筆者は、西川如見「華夷通商考」について、その寒暖を表わす度合がどのような意味をもつかを吟味したり<sup>1)</sup>。ここでは「人国記」所載の気候と、それに関連した若干のことがらについて吟味した結果を報告したいとおもう。

「人国記」は著者不詳の刊本であって、著作年代も明らかでないが、通常足利末期のものとして推定されている。異本も若干あるようであるが、ここでは、平凡社刊：日本哲学思想全書 19<sup>2)</sup>所載のものを用いてしらべてある。

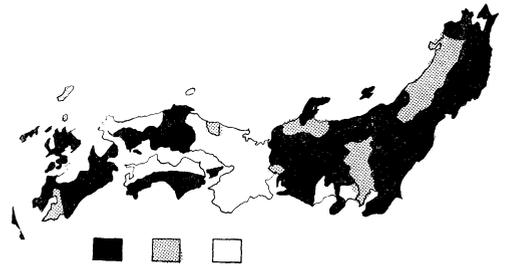
## 2. 記載の様式と分類

「人国記」は日本全国にわたって、国別にそれぞれ地勢・気候・風俗などについて述べてあるが、いわゆる地理的環境論の立場に立つており、モンテスキューの「法の精神」にも比すべきものをもっている。「人国記」の著者は「山城」の項で、《風俗は、其所の水土にしたがふものなり》<sup>3)</sup>といい、《飛弾》の項で、《按、<sup>たにあい</sup>当国は、東西南北皆山にて、谷間の民家なれば、人の心狭。他に漏る気なき故、愚直なり》<sup>4)</sup>といい、《播磨》の項に、《民俗本書に所説のごとくなるは、風土の順気をうくるといへども、憂患に生れ、安楽に死の道理にて、其心に躰忍する事なき故也》<sup>5)</sup>といい、《淡路》の項に、《……尤暖国にして、民俗柔弱にして、しまりなけれども、孤島なる奴、実義ありとみえたり》<sup>6)</sup>と述べているように、地理的環境が民俗や性情をきめることを前提としている。

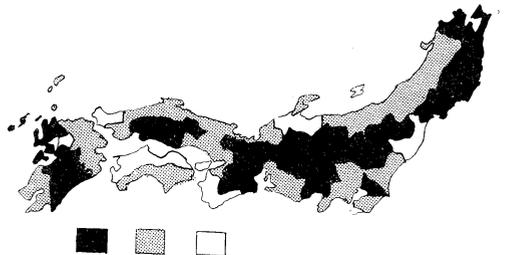
ところで、地理的環境の中で、「人国記」の著書が強調するのは、山地の有無・多少、海浜の有無・多少・寒暑の度合の3つである。とくに寒暑については、《寒雪尤甚し》、《寒気もつよし》、《中正》、《温和》、《尤暖国》、《最暖気》などいろいろな表現が用いられているが、大別して、寒気のあるもの、中正・温和のもの、暖気のあるもの、の3つに分けられる。そこで、山地、

海辺の多少についても多・中・少に3大別してみた。また、風俗についても実義あり・約束を守る・(愚)直である等を「実義」とし、軽薄である・俟・利益にさとしなどを「軽薄」とし、その中間を「中間」として、3大別した。もちろん、これは、「人国記」の記事によって分けたものであって、実際の多少には関係がない(そうすることによって、「人国記」の著書の風土観をつかむのが目的であるからである)。

さて、第1図は風俗の分布区分図で、黒く塗りつぶしたところが「実義」、白い部分が「軽薄」、アミをかけた部分が「中間」となっている。これによると、中部関東以上に実義の国が多く、近畿以南に「軽薄」の国が多い。



第1図 風俗分布図、黒い部分「実義」あり、アミの部分「中位」、白い部分「軽薄」の地域を示す。



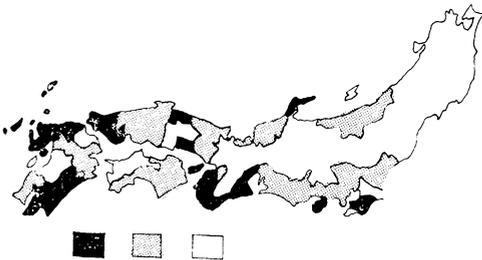
第2図 山地多少の分布図、黒い部分は山地多く、アミの部分は中位、白い部分は山地の少い地域を示す。

又第2図は山地多少の分布図であるが、今日の地理上の知識とは一致しない点も少くない。しかし、これを第1図と比較してみると、かなりよい対応のあるのに気がつ

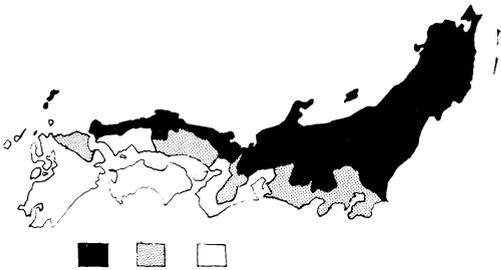
\* A Climatological Examination in "Jinkokuki", 昭和36年1月26日気象学会月例会で発表。

\*\* Tsuguo Watanabe, 気象庁研修所—1962年2月1日受理—

くのである。すなわち、山国とされた国の多くが「実義」あり、山の少いか、または多いことを強調されなかった国が「軽薄」に対応しているのである。次に第3図は海浜多少の分布図であるが、東北地方のように海に接していながら、まったく意識されなかった国もあり、今日の正確な地形図からはなっとくのかない点もある。そして、第3図と第1図とのあいだにはいちじるしい対応はみあたらない。最後に、第4図は、寒暑程度の分布図であるが、緯度分布とよく対応している。そして、第1図との間には割合よい対応がみられる。これら4図の間の関係を定式化するのが次の問題である。



第3図 海浜多少の分布図、黒い部分は海辺多く、アミの部分は中位、白い部分は海浜の少い（あるいは強調されてない）地域を示す。

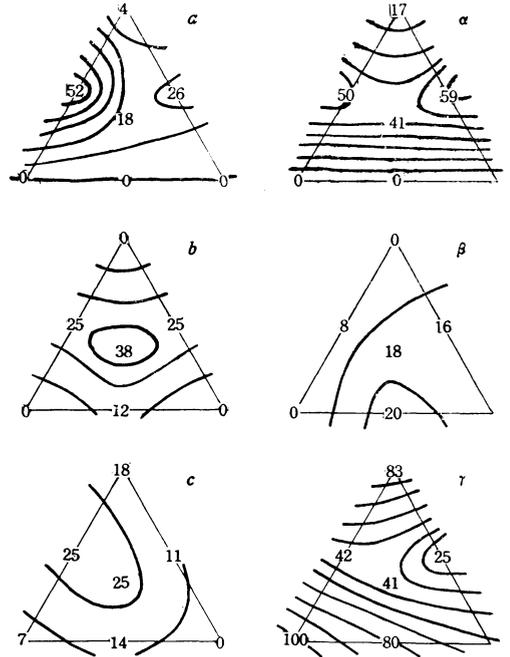


第4図 寒暑程度の分布図、黒い部分は寒冷となる地域、アミの部分は中正・温和、白い部分は温暖な地域を示す。

3. 山地・海辺・寒暑と風俗との関係

まず山地の有無、海辺の有無、寒冷あるいは温暖な国と風俗（「実義」、「中位」、「軽薄」）との関係を見るために第5図を作製した。各正三角形の上の頂点は山の存在を示し、左下の頂点は海が存在、右下の頂点は寒冷であることを示す。そして、各頂点を結ぶ辺の中点はその頂点の事柄が共に存在することを示し、三角形の重心は三者共存を示している。

さて、(a)は「実義」ある国の地理的環境の百分率を



第5図 「実義」(a), 「中位」(b), 「軽薄」(c)なる国の地理的環境を示す百分率および、地理的環境に伴う「実義」(α), 「中位」(β), 「軽薄」(γ)なる国数の百分率を示す。

示している。たとえば、頂点の数4は、「実義」ある国の4%が山地で海辺がなく且つ温暖な国であることを示し、左辺の中点の52は山地もあり、海辺もあり且つ温暖な国であることを示している。従って、海辺があり、山がなく、温暖な国で「実義」ある国は0%、つまり皆無であることを示している。これによると、底辺上、つまり山のない国はすべて「実義」がないが、山と他の要素が共に有する国に「実義」の国が多いことを示している。しかし、実は各環境別個数がちがうから、直ちにこのように判定することには問題がある。そこで(α)図を作った。これは、山地で海辺がなく、温暖な国の中で「実義」ある国が17%あることを示し、山地と海辺とあり、温暖な国の中で「実義」ある国は50%あることを示している。これによると、やはり山地と他の要素と共存した国に「実義」ある国の多いことを示している。同様に(b), (β)は「中位」の場合、(c), (γ)は「軽薄」な場合を示している。

このようにして作られた方法により第5図から次のことがわかる。すなわち、

- (1) 山地は「実義」が多い。

第1表 山地・海辺・寒暑・風俗の組合せの頻度数

	l			m			n			小計	計
p	2(0)	1(9)	3(18)	1(27)	1(36)	1(45)	(54)	(63)	1(72)	10	24
	(1)	(10)	(19)	(28)	1(37)	1(46)	(55)	(64)	(73)	2	
	1(2)	(11)	(20)	(29)	7(38)	3(47)	(56)	(65)	1(74)	12	
q	(3)	(12)	(21)	(30)	4(39)	1(48)	3(57)	1(66)	1(75)	10	17
	(4)	(13)	(22)	(31)	1(40)	(49)	(58)	(67)	(76)	1	
	(5)	(14)	(23)	(32)	(41)	1(50)	2(59)	2(68)	1(77)	6	
r	(6)	(15)	2(24)	(33)	4(42)	2(51)	2(60)	(69)	(78)	10	27
	1(7)	1(16)	(25)	1(34)	1(43)	(52)	1(61)	(70)	(79)	5	
	1(8)	(17)	(26)	(35)	3(44)	2(53)	6(62)	(71)	(80)	12	
小計	5	2	6	2	22	11	14	3	4	68	
計	12			35			21				

(2) 海浜は「軽薄」が多い。

(3) 温暖の地域に「軽薄」が多く、寒冷の地域に「実義」が多い。

4. 山地・海辺・寒暑と風俗との関係(つづき)

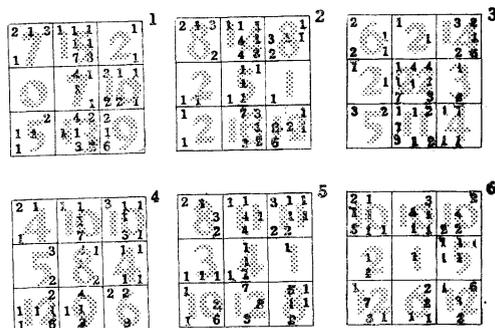
前節には山地・海辺・寒暑と風俗の関係の一端をみたが、山地や海辺のある地域が多いのであるから、これを第2節で述べたように3大別した場合を次に考える。このため3進法4桁の整数を採用し、第1位は「軽薄」のとき0, 「実義」あるとき2, 「中位」のとき1とし、第2位は「温暖」のとき0, 「寒冷」のとき2, 「中正」のとき1, 第3位は海の「少」「中」「多」に従って0, 1, 2とし、第4位は山の「少」「中」「多」に従って0, 1, 2を採用することにする。

たとえば0000は山が少く、海も少く、温暖で軽薄であることを表わし、2201は山が多く、海も多く、温暖で、風俗中位であることを示す。これを10進法に変換すれば0ないし80をうる。たとえば、山城や大和は57(=2010)であるし、志摩は18(=0200)である。このようにして与えられた番号の順に頻度数を表示したのが第1表である。

さて、第1表において、横行のp行には温暖なもの、q行には中正、r行には寒冷なもの、縦行のl行には山の少ないもの、m行には山が中位、n行には山の多いものが入っている。又横行のp, q, rの1番上には軽薄、中には中位、下には実義のあるものが入っており、縦行l, m, nの左から第1行には海の少ないもの、第2行には海の中位、第3行には海の多いもの、が入っている。このように、この第1表は各度数が規則正しく排列されているか

ら、頻度数の吟味に便利である。

第2表



第1表をもとにして作製した山地・海辺・寒暑・風俗の組合せの頻度表、大きい数字はその区劃内の計を示し、小さい数字は次のようである。

(1) 縦行左から山地少, 中, 多; 横行上から暖, 中, 寒; 各行中縦は海辺少, 中, 多, 横は風俗軽薄, 中位, 実義。(第1表と同じであることを注意)

(2) 縦行(1)に全じ, 横行上から風俗軽薄, 中位, 実義で各横行中, 上から暖, 中, 寒。

(3) 縦行左から山地少, 中, 多; 各行中左から暖中, 寒; 横行上から海辺少, 中, 多, 各行中上から風俗軽薄, 中位, 実義。

(4) 縦行左から海浜少, 中, 多; 各行左から山地少, 中, 多; 横行上から暖, 中, 寒, 各行中上から風俗軽薄, 中位, 実義。

(5) 縦行上と全じ, 横行上から風俗軽薄, 中位, 実義, 各行中上から暖, 中, 寒。

(6) 縦行左から暖, 中, 寒; 各行左から山地少, 中, 多; 横行上から風俗軽薄, 中位, 実義, 各行中上から海少, 中, 多。

たとえば、第2表は山地・海辺・寒暑・風俗の2つづつの組合せの度数を示すものであって、2要因の相関などが見やすい。ところで、第2表から知られる主な結果は次のようである。

- (1) 山の少ない国は暖かく、山の多い国は寒い傾向がある。
- (2) 「輕薄」は山の多少にあまり関係はないが、「実義」は山の多い方で圧倒的に多い。
- (3) 海浜の多少と山の多少は逆相関がある。
- (4) 海浜の多いほど暖かく、海浜の少ないほど寒国が多い。
- (5) 海浜の多いほど「輕薄」が多く、海浜の少ないほど「実義」の国の多い傾向がある。
- (6) 気候の寒暑と「輕薄」および「実義」の多少には

関係はない。前節で関係があるようにみられたのは、山地と寒暑の間の正相関のためであろう。

### 5. あとがき

「人国記」所載の気候記事の分析により、この特異な著者のもっていた考えの大要をうかがうことができた。なお、多くの要因からなる複雑な現象を分類するのに3進法の便利なことを示したのであるが、この方法が将来多方面に活用されることを期待したい。

### 参考文献

- 1) 渡辺次雄, 1954: 「増補華夷通商考」所載の気候について, 天気, 1, 19~21.
- 2) 三枝博音・清水幾太郎編, 1956: 日本哲学思想全書, 第19巻歴史論篇・社会篇, 平凡社, 371p, (pp. 147~204参照).

## 気象学と地理学のあいだ

— 吉野正敏: 「小気候」にことよせて —

### 渡 辺 次 雄

マッハの力学史をよむと、よくもこんなことを本気で考えたものだ、とおもわれる史実にぶつかる。たとえば、落体が次第に速度を増す現象の説明として、「旅人は目的地に近づくに従って次第に歩みをはやめるではないか」といったたぐいである。しかし、実は、この種の話は今でも絶無ではない。

気象学が気候学から生れ、気候学はもと地理学の一部にすぎなかったころ、気象(学)がもっていた使命と期待が今日とちがっているのは当然であるが、気象学は一人立ちするにつれて別な方向に動いているのではないかと、とおもわれる点もある。これが、気象教材の問題になるといじめるしく表面にでてくるのである。今こそ、われわれは気象・気候・地理がまだわかれていなかった時代に帰って、地人相関ならぬ気人相関の立場から気象学を再編する必要があるのではあるまいか。今の気象学だけが気象学ではない!!

その点で最近地人書館から刊行された吉野正敏(小気候)は甚だ示唆的である。著者がまえがきの中で、従来いくつかの小気候の著作があるのに、<私のようなものが、こういう本を書くことに対して、かなり抵抗を感じた>といいながらも、<私としては、本書が終着点ではなく、本書を出発点として、ここから進みたいと思っ

ている。つまり、出発点としてのご批判をいただくつもりで、書いたものである>と述べている。実際、本書ははなはだ意欲的であり、小気候の地理学的側面が強調されている。これわまさに、いわゆる気象屋にはほとんど不可能な仕事であって、しかも、従来の地理屋もあまり手をふれえなかった仕事である。

吉野氏が、これが出発点であるというとき、将来へのどのような計画をもっておられるかよくわからないが、本書は気候学と地理学の間を埋める努力をし、大いに成果をあげたとはいうものの、その地理学は自然地理に限られていたとおもう。さらに一歩進んで、気候学と人文地理学との間を埋め、さらに、気象学と人文地理学の間に関連をつけることがのぞましいとおもう。しかし、それはもはや、気象学ではなく、地理学そのものなのだと いわれるかも知れない。それで結構である。名前の如何を問うのではない。盲点の存在を強調したいのである。

気象学的側面にかたよって考えると、地形・地勢・地物との関連において気象学を再編した、いわば地理的気象学の必要性も指摘しておきたい。

ともあれ、吉野正敏氏の「小気候」はとくに気象屋に読んでいただきたい本である。そして、一人一人の意見を聞きたいものである。